

## 第2の扉 (1986～2002年頃)

- 1986年 医療法人近森会 近森病院  
リハビリテーション科長
- 1989年 医療法人近森会  
近森リハビリテーション病院 院長  
「われわれはサービス業だ。可能な限り  
早く始め、できるだけ早くよい状態で  
自宅へ帰す。チームでやる。自分たちの  
給料は自分たちで稼ごう」が合言葉
- 1991年 澤村誠志先生が近森リハ病院を訪れ出会う  
澤村先生から浜村明德先生を紹介される
- 2000年 医療法人社団 新誠会 理事長

# 高知・近森 リハビリテーション病院時代

## 近森での回復期リハビリテーション病棟事始め

ちかもり まさゆき  
近森 正幸

社会医療法人近森会 理事長

石川さんに最初にお会いしたのは1977年で、私が外科医だった頃、群馬大学からサポートで2か月、脳外科医として近森に来てくださったときでした。フォガティーカテーテルによる大腿動脈血栓除去術を一緒にして「手術がうまい」と褒めてもらったのを覚えています。

石川さんがリハ科医として働いていた虎の門病院分院を辞めるときには、20病院ぐらいからオファーがあったようですが、高知が四国山脈と太平洋に囲まれ、地域リハビリテーションが可視化でき展開しやすかったこと、街なかの救急病院の隣で温泉リハビリではなく都市型リハビリテーションを確立したかったこと、当時の近森病院は組織が未成熟でリハ医療を院内で確立しやすかったこと、理事長、院長の私が40歳になる前で若く柔軟だったこと、救急病院で結構利益が上がっていたことなどを石川さんはしっかり考え、近森に来てくださいました。今では常識になっていますが当時は石川さんの地域リハや都市型リハの発想は非常に斬新で、目から鱗の思いでした。

1986年6月の高知赴任時、石川さんは虎の門病院の優秀な看護師も連れてきてくださり、駅前の分院にリハ科を新設。病棟のベッドの脚を高齢患者が離床しやすい高さまで切ることから始め、リハビリテーションの中核であるリハ看護師、リハスタッフを養成しながらリハビリテーションの素晴らしさを近森病院の職員に広めてくれました。

その後、エレベーター付き2階建てのプレハブでのリハ病棟の実践を経て、近森病院の隣地に1989年12月、近森リハビリテーション病院を開設していただきました。開院祝いのご夫妻の誇らしい笑顔、病院を見にきた地元の方の驚いた顔、そして何より天井の高いワンフロアの、柱のない広々とした5階リハ訓練室を「リハスタッフの誇りのために作った」と紹介した石川さんの言葉を今でも覚えています。

石川さん赴任以前の近森病院は、PT・OT・STの3職種は揃っていましたが人数も少なく、訓練室でのリハのみで、寝たきり患者が全病床の2/3を占め、その上澄みで救急医療を行っていました。回復期リハビリテーションの確立により急性期と回復期の2つのステージに分かれ、各々の機能への絞り込みを強化していったことで、近森リハビリテーション病院は全国有数の全館回復期リハ病院に、近森病院は全病床を救命救急医療に特化、救急搬送件数では中四国で3番目、高知ではトップの屋上ヘリポートを有する救命救急センターにまで発展できました。

石川さんがリハビリ砂漠と評していた東京でリハ医療を展開する夢のため高知を離れる送別会の時、「石川先生は日本の国を治す“大医”、畳の上では死ねないね」といって送り出しましたが、最後まで街なかを自転車をこいで往診され、人生を賭けて、私たち皆の思いを実現してくれたように思います。

# 何と、壮絶なる生き様か！<sup>ざま</sup>

くりはら まさき  
栗原 正紀

長崎リハビリテーション病院 理事長

5月24日、巨星墮つ！ 誠に残念無念。あまりにも大きな喪失感。

「死」は生ある限りいつも傍にあり、超越することのできない必然であるにもかかわらず、自分にはまだまだ先のこととして往々にして向き合うことを避けるもの。ところが、年をとってくると「死」をだんだん身近に感じるようになってくるようだ。それは、先が短いとか、体力・気力に自信がなくなってきたからというだけではなく、何よりも親しくしている人との永の別れを経験するとなおさら強烈。

救急医療に従事していた若い頃は、「死」の多くは医者と患者の関係での“死亡宣告”だった。何回やっても慣れることのできないセレモニーだった。そして50歳代は身内との別れ。近森リハビリテーション病院に勤務するようになって両親を亡くした（私が縁もゆかりもなく、全国的にも有名なこの病院に赴任するようになったのは石川さんの紹介である。その意味で間違いなく、私の人生の転換スイッチを押したのは石川さん）。親を亡くした時、「親孝行したいときには親はなし」という先人の教えが身に染みた。

60歳代になると同級生、身近な先輩、親友などとの別れがやってきた。

そして古希。「死」は向き合わざるを得ない、とても身近なものになってきている。

「殿が電話で『俺はステージ4だよ』と連絡してきたんだ」と高知の某氏（彼は昔から石川さんのことを『殿』と仰いでいた）が「誰にもいうな」との厳命だったがいたたまれず、知らせをくれたのが5月8日。聞けば2～3年前から肺がんの治療を行うために、いろんな役職を降りていったとか。まさかそんなこととは露知らず。見事な箱口令<sup>かんこうれい</sup>だった。

すべての事柄を整理し、数年間、自らの死と向き合い、受け入れ(?)ながら、なおかつ最期まで自分らしさを貫くという石川さんの生き様。壮絶な別れを含め、残されたものとしてそのすべてをただ受け入れざるを得ないもどかしさがいまだ渦巻いている。

以前、浜村さんが「石川さんは誰にも弱みを見せないヒトだからなー！」といていた。確かに石川さんの口からネガティブなことや愚痴めいた言葉を聞いたことがない。すべてが前向き、「正しいと思ったら、何事も前向いて、やりゃーいいんだよ！」といつもいていた。厳しさの中に寛容があった。とても真似できない。

いずれ、そう遠からず、また会うことになる。その時は彼が好きだった大吟醸の「土佐鶴」を酌み交わしながら、あまりにも強烈すぎる死に様に一言、苦言を呈するつもり。

亡くなった翌日、ご自宅に伺った。ff(フォルティシモ)の曲が流れる部屋のベッドに横たわったその姿は、まるで即身仏だった。

合掌

## 石川さんの傍らで学んだ33年間

もりもと さかえ  
森本 榮

医療法人社団輝生会 生活支援局長

## 1. 「人をその気にさせる言葉」と「リーダーとしての行動」

理学療法士経験12年目の1988年、故郷の高知への転職活動中に近森病院在職の石川 誠さんと酒を酌み交わし話す機会を得ました。初対面ですが、この人ならば人生を賭けられる、と決心し、翌年就職し石川さんとの33年がスタートしました。

当時の石川さんの働きぶりは、平日日中は医師として入院・外来診療、当直週3回、当直以外には会議、終わると皆で飲み会、締めには川べりの屋台でラーメンと餃子、午前様で病院に戻り依頼原稿や残務処理、土日は在宅患者の往診です。これだけ忙しくても、仲間の相談に応じる懐の広い人でした。

近森での私への指令は1991年頃から「PT30人以上集めろ」、集めれば1995年頃から「土曜祭日訓練実施しろ」、並行して「病棟配属しろ」でした。当時は前人未到の課題に感じましたが職員一同、一心不乱に取り組みました。それができたのは、根源に石川さんの「人をその気にさせる言葉」と「リーダーとしての行動」があったからだと思います。その人間力が夢を現実のものにしたと考えます。近森で病棟配属達成の際、一流旅館の大広間で職員全員参加の大宴会を行いました。石川さんは夢を達成した喜びで文章には書けない酔い方となっていました。

## 2. 「やり抜く力」

近森の仕組みから全国に展開するまでには石川さんのさまざまな行動が影響します。

1991年頃、私の前勤務先である兵庫県立総合リハビリテーションセンター・中央病院院長の澤村誠志先生と石川さんを引き合わせる機会を得ました。これを契機に、澤村先生の指名で石川さんはリハビリテーション病院協会の理事としてリハビリテーション医療の発展に奔走します。

特に澤村先生から「石川君、厚生省のどの部署のどの机に誰が座っているのか覚え、厚生省を批判するのではなく、技官と仲良くしろ」と教えられ、厚労省へ25年近く通い続けます。夜中に厚労省から電話依頼を受け、朝まで資料を作成する姿に幾度も遭遇しました。結果、厚労省内部で「リハビリテーション医療は石川 誠さんに相談」といわれるまでになりました。

1995年頃から近森の取り組みが世間に広がり、全国から見学者が殺到します。見学対応疲れの私に、石川さんは「近森の仕組みで終わってはだめだ、全国にこの取り組みが普及しないと何にもならない、気を抜くな」といわれました。さまざまな活動を「やり抜き」、多くの賛同者の輪を作ることで、回復期リハビリテーション病棟の新設につながったと思います。

以後も過去の経験を踏まえ東京に拠点を移し、医療法人社団輝生会の創始者として、多くの若者に石川さんの生き様を見せてきたと思います。

私が法人への遺言を託された際に、「やりきった、思い残すことはない」と笑いながら語った石川さんの顔を忘れることができません。石川さんの傍らでさまざまな経験から学んだ33年間は私の財産です。心より感謝します。

# 石川さん、お疲れ様でした。そしてありがとうございました！

いとう たかお  
伊藤 隆夫

栗原整形外科リハビリテーションセンター 理学療法士

私は1985年に理学療法士として高知市の近森病院に就職しました。そして、その翌年に、石川さんが東京の虎の門病院からリハビリテーション科の医師として赴任されました。

とにかく現状に満足せず、皆で理念を共有してブルドーザーのように前へと突き進んでいきました。口癖は「患者さんにとってよいと考えられることは率先してやれ！ 制度や報酬はあとから付いてくる！」でした。そして、「責任はすべて俺が取るから」。この最後の一言にはどれだけ勇気づけられたかわかりません。

1987年には「継続医療室」を発足させ、医師、看護師、ソーシャルワーカー、理学療法士、作業療法士の主だったメンバー十数人がほぼボランティアで在宅医療を実践していきました。ある高齢の頸髄損傷の方のご自宅を石川さんが訪問すると、トイレと浴室が汚物まみれの水浸しになっていました。水洗トイレが詰まったためでしたが、主介護者の奥さんはアル中で眠りこけ、本人はおろおろするばかり。石川さんはすぐにスーパーに走って“スッポン”（ラバーカップ）を買ってきて詰まりを直し、さらに半日をかけてきれいに掃除して帰ってきたことがありました。在宅支援では「とにかく困ったことがあれば、それをまず解決することが重要」という基本をこのとき教えてもらいました。

1989年末に近森リハビリテーション病院の開設に至り、この頃から少しずつ石川さんの高知での活動が全国に知られるようになっていきました。兵庫リハの澤村先生や長崎の浜村先生との交流も始まり、お客様や見学者が増えていきました。「制度を変えるためには自分たちの実践をしっかりと見てもらうこと。それには現場もさることながらお客様・見学者との飲み会も重要だ」というのが石川さんのポリシーでした。とにかく半端じゃない接待で二次会、三次会と夜通し飲み明かす感じでした。接待の厳命を受けながら途中でウトウトしてしまうこともあり、「気合が入っていない！」と大きな雷を落とされたのが昨日のこのように思い出されます。

病院経営者の宿命で石川さんも何度か大きな借金を個人的に抱えたことがあったようです。「近森の頃、胃が痛んで血を吐いたこともあったよ」と十数年後ポロリと話されたことがあって、人知れず大きなプレッシャーを抱えていたのだと今更ながら頭が下がりました。

そんな中でもスタッフを引き連れて飲みに出かけ、徹夜でリハビリテーション医療普及のための資料作りに励んでいた姿が思い出されます。高知でも東京でも周りには「あんな病院はすぐに潰れる」との心ない声もありましたが石川さんは「One for All, All for One！」のラグビー魂と、一緒に汗をかく熱き仲間を心の支えにして踏ん張れたのだと思います。

私は出来の悪い弟子でしたが、現在私があるのはすべて石川さんのおかげだと思っています。人の何倍ものスピードで活動してさまざまな業績を築き上げ、駆け抜けていかれました。

本当に長い間、お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

## おかしな脳神経外科医～石川さんの思い出・佐久編

やすだ さちこ  
安田 佐知子 看護師 前職（佐久総合病院～近森・近森リハ病院～輝生会）

大きな身体で、小さな球に翻弄されている青年。院内卓球大会での石川さんです。

45年ほど前のこと、佐久総合病院に脳神経外科がやっと開設されました。石川さんは2年目の若手医師として、先輩医師と赴任されたところでした。早々に大会の選手に駆り出された様子。でも、少々苦手なスポーツだったのかも。

このことからか、厚生連球技大会では応援団として活躍されます。「勝敗の責任は応援にかかっている」と、張り切って応援の仕様を考え、合宿の企画運営までも取り仕切りました。大会終了後、解団式はなくそのまま遊び仲間たちへと移ります。スキー、キャンプ等々謳歌しました。皆で一つの事をやり遂げる、そして楽しむ。リーダーは、もちろん石川さんです。

脳神経外科医としての石川さんは、それまでの医師とは大きく違っていました。ストレッチャーを押して患者さんと手術室に入り、麻酔がかかるまで側に付き添っています。手術を終えて病棟に戻る時も患者さんと一緒にです。当時は搬出入はナースに、麻酔医に任せきりが当たり前でした。

その頃は紙カルテで、患者記録は1冊。医師の記録の多くはドイツ語？ 英語？ のメモ書きでほんの数行程度記載されていた時代です。

脳動脈瘤のAさん。手術は無事に済みましたが自発的な動きもなく、表情も乏しいまま経過していました。ある日、石川さんがベッドから起こし、座らせ、立たせることを始めてから、リハビリ室まで自分で歩いて行けるようになりました。その後順調に回復したAさんがある日、石川さんに歩行用の自分の松葉杖を示してしきりに何か訴えています。なかなか伝わらずもどかしかったようですが、あきらめず訴え続けました。初めて歩けた記念と石川さんへの感謝の気持ちで、杖にサインがほしかったというのです。同様に、かかわった患者さんとのさまざまなエピソードがカルテ3～4ページにわたって記載されていました。ナース間でカルテの奪い合いです。感動小説のようで涙しながら読んだカルテもありました。

たった2年間の佐久総合病院勤務でしたが、他スタッフやナースたちに鮮烈な印象を残して石川さんは群馬大学医学部に戻られました。

その後も縁は続き、高知の近森病院、東京のたいとう診療所、初台リハビリテーション病院、再びたいとう診療所へと。半世紀近く石川さんのシippoにつかまり走り続けて参りました。在宅を中心に素晴らしい仕事に楽しくかかわらせていただきありがとうございました。

「僕の宝ものは一緒に造り上げる、ここにいる仲間たちです」。近森リハ病院開設パーティーでの石川院長の挨拶の言葉は心の奥に今も、温かく灯っています。

## 愛すべき人たらし～石川さんの思い出・高知編

かわらぎ ゆうこ  
河原木 裕子

看護師（虎の門病院分院～近森・近森リハ病院～輝生会）

石川さんは愛すべき『人たらし』でした。私はこれほどの人たらしに出会ったことはありません。40年前に出会った当時から血気盛んで、患者さんや家族、そしてスタッフにも人気がある医者でした。8年間同じ病棟で働き、ある時高知県でリハ専門病院構想があり、「一緒に行かないか」と数人の看護師仲間と共に誘われました。決して強引でも執拗でもなく。

当時私はリハ看護が面白くてリハ専門病院構想にも石川さんと一緒に働くことにも魅力を感じました。でも、即答できませんでした。交際中の男性（現夫）のこと、見知らぬ土地での生活、仕事上の困難さに躊躇しました。そんな後ろ髪を引かれる思いや不安を打ち消したのは「石川さんの力になりたい」という思いでした。石川さんのひたむきで私欲がなく、人のために努力する姿は人の心を動かし、仲間を集め、事を成し遂げていく特別な力だったと思います。「石川さんの力になりたい」。そう思わせる不思議な力がありました。

そんな石川さんの人たらしの技は各方面で発揮されたと思います。スタッフはもちろん患者さんや家族、そして、飲み屋のおじさんおばさんにまで……。ある時スタッフがよく集まる定食屋で私が石川さんへの不満を口にしてしているとそれを小耳に挟んだ女店主から「石川先生の悪口をいうんなら帰ってくれ！」と強い口調で睨まれました。睨まれたことより、こんな所に来て石川ファンがいることにとても驚いたものです。

石川さんの口癖は「やるしかない」でした。私は心の中で「どうぞ一人でやってください」といっていましたが。石川さんはそうやって自分も周囲も鼓舞していたのでしょうが、石川さんのいう「やるしかない」ことは大抵の場合、周囲を巻き込まないとはできることではないのです。しかも、熱意はあっても私生活上制約があるスタッフも多く、動ける人材は限られ結局、同じような人が動くこととなります。加えて石川さんは結果や成果を期待するので、いい加減なことはできません。

私には石川さんの期待に応えられず情けなく辛かった思い出があります。その頃、学会や研究会では発表することが当然という雰囲気の中、近森リハ病院が開院後間もなく、あるリハ看護学会で初回の演題募集がありました。しかし私には発表するに足る題材もなければ開院直後で時間的余裕もなく、結局演題は出せませんでした。その報告を石川さんにした時、「話にならない！」と本当に本当に冷たくいわれ、30年以上たった今でもありありとその情景を思い出せるくらいです。

最後に、私の仕事に対する意識を変えた石川さんの言葉は、「仕事とは（一大プロジェクトのように）何かを成し遂げることであって、君たちが日々行っているのは、看護労働にすぎない」。

小事に悩み疲弊する私たちへ「毎日の労働にばかり目を向けず、大局を見て行動しなさい」という石川さんからのエールであり、私が高知で石川さんと仲間たちと共に仕事を続ける覚悟を決めた言葉でした。

## 先生、また一緒に飲もうぜよ。

いしはら ひろし  
石原 寛

石原産業（近森病院北館1階） 代表取締役

それは春の日差しがほんのり暖かい午後、3時か4時前の頃と記憶が残る。高知市追手筋おうてすじの小さなビル2階のJAZZ喫茶。チリンチリン、ドアの上に下げたベルが鳴り、入ってきたのは、背の高い、がっしりした体格の男性。大きなバッグを肩に提げている。折りたたみの自転車だ。高知競輪の選手だと思った。「ホットコーヒーを」「いい店ですね」。これが石川先生との運命はるばるの出会いだった。その日の夜10時頃再び来店。プロペラ機で遙々東京から来られたとのこと。数か月後、再び来店。今度は昼と夕方、夜にも。以後3か月に一度来店された。ある夜、「僕、高知に来ようと思う。近くの近森病院が雇ってくれるらしいから」。そして、先生は東京を引き払って高知に。

近森病院に着任後、来店しては、高齢化社会到来後の医療のあり方、役割などの話をしてくれる。私にとっては馴染みの薄い話だったがわかりやすい。「手術したらベッドに寝かせたきり、ではいつまでたっても家に帰れない。人は自分の家で往生したい。それなら術後からリハビリをして歩けるように、さまざまな知識・技術をもった人が集まって総がかりで治療を行う」それを先生は日々実践された。

ある日来店して私に「病院の車いすをちょこっと見てくれないかな」。車いすの肘掛ひじかけの改造や片側ブレーキレバーの延長が必要だという。聞けば納得できる理由、手仕事は得意だ。早速、店は従業員に任せて近森病院に出かけた。それは後に退院する患者さんの自宅改修、手すりの取り付けへとエスカレートした。私では適かなわないことは知人の大工、左官、電気屋、設備屋、鉄工所の社長、家具職人等々が桃太郎の仲間よろしく参加してくれた。患者さんの家族や石川先生の無理目な要望にも「それはできんぜ」といったことは一度もない。仲間もいわない。いろいろな工夫をしてこなし。いつしかテクノエイドの助っ人仕事の本職に。

時は流れた。2021年5月8日、流行り病の中、埼玉の自宅を訪ねた。背を向けて屈かがむようにベッドに寝ていた。ゆっくり振り向いてあの人なつこい笑顔、「なんだ石原さん来たのか」。瘦せた姿に言葉を失った。ONE FOR ALL ALL FOR ONEと書かれたTシャツを着ていた。何を話したか定かな覚えはない。帰りの飛行機の時間がせまり、いよいよ時間がなくなった。

「蓮はすのうてなで待ってるよ、ゆっくりおいで。また飲もうよ」先生がいった、うなずくだけで言葉が出ない、直立不動で敬礼をした。部屋の出口でいたたまれず振り返って先生を見た、今度は先生がベッドに座り直され背筋をお伸ばしになり敬礼をされた、私は答礼を返した。これが酔っぱらっては私を戦友と呼んでくれた先生との別れだった。

巨星が逝ってしまった。訃報に仕事仲間は声を失った。疫病の蔓延はびこる今、お互いに会って先生との苦勞話を語り懐かしむことさえ許されない。しかし、One for All, All for Oneに参加できたという思い、自負は人生の糧である。心より御礼を。ありがとうございました。

## 出会いも別れも突然に

いのうえ いく  
井上 郁

元 高知女子大学(現 高知県立大学)看護学部・研究科教授～輝生会

石川さん、もう30年近く経ってしまいましたが、初めてお会いしたあの日のことを覚えておられるでしょうか。

当時まだアメリカの大学院生で博士論文作成中一時帰国していた私が、高知の近森リハビリテーション病院の応接室で看護部長のお話を伺っていた時、風のように入ってこられて第一声、「あなたアメリカから帰ってこられたそうですね。ちょっと聞きたいことがあるんですが。“MDS”というのをご存じですか。あれは今アメリカではどんな感じですか」。突然の質問にびっくりしながら私の知る限りの周辺状況をお話ししました。そして追加質問などいくつかのやりとりが続いてひと段落すると、まだ何が起きているのかよくわからずポカンとしている私を置き去りに、また風のように部屋を出ていかれました。「あれがウチの院長です」。看護部長が笑いながら教えてくださいました。それが石川 誠さん、あなたとの初めての出会いでした。

翌年帰国し高知の大学に就職し、近森リハビリテーション病院で学生実習をさせていただくようになって、本格的なお付き合いが始まりました。看護の歴史や保助看法と看護師の役割、看護とリハビリテーションのかかわり、いろいろな話をしましたね。時には大学の私の研究室に電話をくださって、「今ちょっと時間ありませんか。病院に来ませんか」とおっしゃる。目的は、何か新しい話題についてディスカッションしたいとか、初めての方に引き合わせたいとか、いろいろでした。いつも突然でびっくりのお誘いでしたが、無理をしてでも伺ったのは、どれも興味深い内容だったからです。

厚生労働省の視察団に誘っていただきアメリカにご一緒したこともありましたね。当時新しい制度が動き出したばかりのホームヘルスケアの中核で働く研究者たちとの出会いや、経済的に改革を迫られていたメディケアの専門家たちとディスカッションする機会を得られたのもその時でした。他の同行者がお酒を飲まれない方たちだったこともあり、毎日のように夕食後二人でホテルのバーでチョコレートを肴にお酒を飲みながらいろいろな話をしましたね。本当に貴重な時間でした。その時私がぼろっと漏らした「将来はできたら臨床に近いところで働きたい」という言葉を覚えていてくださって、後に初台リハ病院を開院された時に声をかけていただき、転職につながりました。

最初にお会いした時も突然でしたが、お別れまでもがこんなに突然になろうとは思ってもみませんでした。また風のように去っていかれて、もう少し、もう一度、お話がしたかったと悔いています。でも石川さんにつないでいただいたご縁は高知から東京へ、全国へと広がり、あのまま大学にいたらきっと出会うことのなかったであろう方々との大事なお付き合いが今でも続いています。

感謝です。ありがとうございました。

げき  
檄飛ばされつつ未知の仕事も多く経験まつぎ ひでゆき  
松木 秀行 近森リハビリテーション病院 元リハビリテーション部長（理学療法士）

1986年に近森病院に赴任された翌年、在宅生活を支える目的で「継続医療室」を立ち上げ、土・日・祝日手弁当で訪問活動を開始しました。まだ制度としても住環境整備等が十分でない中、家族や看護師と人力で入浴等のADLにかかわりました。当時は病院でもADLに直接介入することがなく、在宅を見据えて何を考え何をすべきか気づかされた活動でした。

1989年、近森リハビリテーション病院開設の挨拶で「建物はお金をかければ立派な物はできますが、私が自慢できるのはスタッフです」と、職員に対する思いを聞いた時には胸に熱いものを感じました。チームアプローチの強化を掲げた取り組みが始まりましたが職種間には垣根があり、チームアプローチの実践には多くの問題がありました。

ある時、PT・OT・STは何ができて何ができないのか、PT・OT・STの配置により入院・外来・在宅のそれぞれ何が変わるのか、それらをどう機能させることがベストなのか、効果や成果は？経済的効果はどの程度あるのか等々について、リハ部門の会議の中で話し合ったことがありました。すでにその頃、入院から在宅医療までの流れとリハの効果を見据えていたのかもしれない。

これらを考えながら、朝の申し送りへのセラピスト参加、カルテの一元化、病棟訓練や病棟担当制を導入して、徐々に病棟を中心に活動する体制に重点を移していきました。事あるごとに飲みを誘っていただき、夢や将来像を語っているうちに何だか達成できそうな気分になることが多々ありました。飲みに行った後、先生は家に帰ることなく病院に戻り仕事をしていることが常でした。

「病院で土・日・祝日休みなのはセラピストだけだ、他の職種は交代勤務している。いつになれば週7日訓練ができるのか？」と檄を飛ばされ、人員確保や体制づくりに奮闘した時期もありました。実現できた時には本当に嬉しかったようで、大宴会を開いていただきました。その後の話で「費用は銀行からの借金だよ」と話していました。

活動拠点を東京に移した先生に、回復期リハ病棟協会の研修委員に加えていただきました。研修後の懇親会では先生の周りに参加者が集まり、いつも「よろず相談所」となっていました。人を惹きつけ元気にする話し方、語り方、表情や立ち居振る舞いを忘れることができません。

2007年に発足したPTOTST委員会の委員長に任命いただき、「セラピストのマニュアル」「セラピスト10か条」の作成と「認定制度」の企画運営の使命が与えられました。委員会活動が頓挫していると沖縄から福岡での研修会後の席に来て自身の思いを語り、勇気づけて、翌朝また沖縄に帰って行ったことがありました。寄り添い、面倒を見ていただき、委員の協力や努力もあり何とかこれらの使命を達成し継続、発展させていくことができました。

近森会での取り組みや協会の活動でいろいろな未知の仕事を経験させていただき、人生の成長に導いていただいたことに感謝しています。

## 先まで思い描き常に前を走っていく人

たむら

田村 キミ子

近森リハビリテーション病院 元総婦長

先生とは、近森病院に赴任された1986年から十数年間一緒に働かせていただきました。

赴任後間もなく看護師5人の助人が加わり、病棟の環境改善や付き添い看護から基準看護への転換を経て近森リハビリテーション病院の開院と、常に前を走っておられました。そしてリハビリテーション看護提供の基準を明快に示され、慣れない私たちに看護を、自分たちの手で責任をもって実践する喜びを教えていただきました。リハビリの主役はリハスタッフという時代でしたが、先生は患者さんの生活の場を担っている看護職員こそチームの要であると、いつも支えてくださいました。

病院独自で実施した病棟看護職員の48時間業務調査の膨大な資料を分析され、毎日夜遅くまで医局の隅のパソコン前で論文や講演の準備をされていた姿が今でも鮮明に思い出されます。

その後リハスタッフの病棟配属等、次々と試行・検証を進める先生の速さに「私たち先生に付いていけません」と申し上げましたが、先生は「振り向けば君たちはすぐ後ろにいるじゃないか。この病院や地域だけでなく日本全国津々浦々で同じことができるようにしなければ」といわれました。先の先まですでに思い描かれていらしたのですね。このような変革期に一緒に携わらせていただき本当にありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

## ま す 真っ直ぐでシンプルな言葉

てらやま

寺山 みのり

近森リハビリテーション病院 看護部長

私の中の石川さんといえば、ポロシャツにチノパン、素足にサンダル姿だ。院長室に寝泊まりし、患者さん用の洗濯機で自分の衣服を洗濯する。徹夜したような顔つきで朝の病床会に来て、師長たちの議論を微笑みながら見守る。近森の実践を全国へと留守が多かったが、いつもスタッフを気にかけて信頼し、時に顔を見て話すためだけに高知に帰り、東京にとんぼ返りするような人だった。ひっきりなしに来る見学者への対応は「いつもやっていることを話せばいいよ」と師長に一任する。実践を言葉にして伝えるうちに、私たちは多くの気づきと自信を得て、人との出会いやつながりの大切さを学んでいった。

来客があると石川さんは医局向かいの小部屋の作業テーブルをちょっと気の利いた食卓へと整える。テーブルクロスにランチョンマット、そして“一輪挿しの赤い薔薇”。昼食は二段重ねの鰻重と決め、連日でも譲らない。お酒が入ると石川さんは「皆、ちゃんとやっていますよ」としみじみと呟く。「リハが必要な人がいれば、砂漠にだって行くぞ！」ともいつていた。私は本物のラクダを想像して、それが現実になると信じた。

のちに石川さんと訪れた帝国ホテルのエレベーターの中に同じ一輪挿しの赤い薔薇を見つけた。仲間と食事をしたあと、「いろんな生活があることを知ってほしいんだ」といつていた。

石川さんの言葉はいつも真っ直ぐでシンプルだ。「師長の役割はね、いつも笑顔でいることだよ。スタッフを元気にすること！」その言葉で私たちは元気になる。

## ff (フォルティシモ) の大合唱とポイントピア

おがさわら 小笠原 正

近森リハビリテーション病院 リハ部長 (理学療法士)

石川先生が近森会にリハビリテーション医として着任されたのは1986年4月で、35年前のことになります。石川先生はその頃からいつ自宅に帰っているのかわからないくらい、朝早くから夜遅くまで病院で仕事をされていました。仕事だけでなく、病院のイベントや飲み会には必ず顔を出し、スタッフとの交流を大切にされていました。そんな時に必ず行っていた締めが、ff (フォルティシモ) の大合唱とポイントピアです。ff (フォルティシモ) はハウンドドッグの代表曲、ポイントピアはラグビーで行う石川先生のルーティンで、この2つは、一体感が感じられるパフォーマンスとして1988年頃からイベントの締めの恒例となりました。

私たちは石川先生が活動を東京へ移されてからも、よく締めにこの2つを行っていました。ただ、最近はコロナ禍で宴会もなくなり行えていません。コロナ禍が収まれば石川先生を交えてまた皆で盛り上がりたかったのですが、今はそれも叶わず、残念です。

ff (フォルティシモ) とポイントピアは、石川先生が最後まで貫かれたリハマインドとともに、後輩たちに語り継いでいきたいと思えます。この場を借り、石川先生のこれまでのご支援に感謝するとともに、ご冥福をお祈りいたします。

余談ですが、今から32年前の私の結婚式でも石川先生はスタッフとff (フォルティシモ) を歌い式を盛り上げてくれました。私にとって、石川先生を語る上で欠かせない思い出の曲です。

## 誇りをもって仕事をする

うちだ ようこ 内田 陽子

近森リハビリテーション病院 事務長

私が就職した2000年4月には、石川先生は東京に拠点を移し、全国を忙しく周っておられました。

帰高される水曜日には大量の仕事を持ち帰り、不在中に入ったスケジュールを確認・調整し、スライド・書類作成の指示を出し、高知でもびっしり詰まった予定をこなし木曜日の朝、仕上がった資料をもってまた全国へ飛び立っていく生活を送られていました。新卒で入職した私は、指示された仕事を先輩の指導を受けながらやっとの思いでこなしていましたが、石川先生は折に触れ、私の仕事の意義・役割について教えてくださり、病院運営にはどの職種の力も必要で、事務職も「チームの一員」であることを伝えてくださいました。今日に至るまで近森リハを愛し楽しく仕事ができているのは、石川先生が、誇りをもって仕事をする大切さを最初に叩き込んでくださったからだと思います。また、「本物を知らないといけないよ」と、ご自身がお忙しい最中も私たちの夏休みや冬休みには師長や先輩秘書と一緒に東京に招き、美味しいもの、美しいものを教えてくださいました。当院も開院から30年がたち、石川先生を直接知るスタッフも少なくなりましたが、開院から変わらない理念のもと、石川先生の想いは受け継がれ、風土となっています。新病院でもふと石川先生の空気を感じる瞬間があり、今も変わらず見守ってくださっている気がしています。



上と右：『近森会 50 年誌』「近森リハビリテーション病院」より。石川 誠院長の紹介欄には「全国版の活動のとても多い石川院長に、日中のふつうの時間帯に院内で会うことはむずかしい。本院の回診を終えた石川先生がリハ病院の方へ秒速 3 メートルで帰る途中の、ほんの 45 秒間だけ時間をいただいた」と、書かれてある。 1996 年



下左：近森リハビリテーション新築落成披露の日の医局員紹介 1989 年





上：『近森会 50 年誌』より。「ある日の屋下がり、おそい昼はレトルトのカレーと氷水だった」とキャプションが添えてある。隣は田中正樹医師 1996 年

下：訪問看護ステーションちかもり開設時。右から、伊藤隆夫さん、所長の大月（当時）さん、訪問看護師さん 3 名をはさんで一番奥が石川さん。1993 年